

<福島県知事賞>

「義務」から生まれる幸せ

白河市立東中学校 3年 徳富 葵

「税金」について、私は、作文を書くのにあたり、改めて考えてみた。と、いいつつも、今までの私は、税金について関心が無かった。私たちに最も身近な税の「消費税」でさえも、買い物をする時などに、毎度、考えるようなことはなく、税とは、少し縁が遠いように感じていた。

そこで、私は、父に税について聞いてみることにした。父は、電気の仕事で自営業を営んでいる。「地域の人々を大切に下さい」という、祖父の言葉のもと、毎日、毎日、朝から晩まで、時には夜中も働いている。その姿は、まさに「熱男」であり、私のやる気の源である。私は、父の仕事の休み時間を利用して、「税についてどう思う？」と質問を投げかけてみた。その答えは、やはり勇しく、仕事漬けの父の言葉だった。

「税金を払うことは、国民の義務であって、俺たちは、その税金に助けられているんだよ。あの、うちの仕事って、民間事業だけでなく、公共事業においても、仕事させてもらってるだろ。その公共事業の仕事をして、新たな施設が完成すると、俺たちは税金をもらうんだ。その税金は、国民が納めて成り立っているものだから、俺たちは、それに見合うような仕事、あるいは、そのプラス、働くんだ。だから、ガス漏れなどのミスはあってはならないんだ。」

私は、これらの言葉を聞いて、父が毎日、一生懸命に働いている意味が分かったような気がした。私も税金を払うようになった時は、その税金を父のように、大切に思ってくれるといいなと思った。また、私も税金によって、何かをさせていただくような時が来たら、税金の重さ、大切さを感じて、精一杯、頑張りたい。しかし、私たちは、もうすでに、税金に支えられていたのだ。というのは、私たち中学生や小学生の教科書は、税金によって、無償で提供されている。それならば、私たちはその教科書を丁寧に扱い、税金を納めて下さっている人たちはもちろんのこと、身近な両親にも感謝

の気持ちを持って、一生懸命に勉強しなければならない。そして、大人になったあかつきには、たくさん働いて税金を納め、子どもたちに、たくさん勉強してほしい。そう思える大人になりたい。と、私は改めて感じる事ができた。

私は、この作文を通して、「税金」に対する少し重荷のようなイメージが変わったような気がした。これからは、税金を納めてくれている方々に、感謝の気持ちを持って生活していきたい。そして、最後にこのように伝えたい。「ありがとうございます。」